

第86回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2016年7月11日 (月) 14時～17時

兼題「甚平」

- 川井素山 ○甚平着て豆腐屋までの外出かな  
青簾下駄の緒通す指太し  
谷間の湯ランプの点れる黴の宿  
一風にしばし揺れてる半夏生
- 保井寶正 ○甚平やワイン片手に棋譜を読む  
紫陽花やワイングラスに投げ活けり  
パラソルの水玉叩たく驟雨かな  
終戦の酷暑を胸に傘寿かな
- 後藤克彦 ○隙間なく草の天下か梅雨の庭  
梅雨明けやノルマ枷ての朝散歩  
米の郷自慢の田にも蚩舞ふ  
甚平や似はふ似ははぬ妻笑ふ
- 佐久間喬 ○甚平を着るや全てがいいかげん  
十薬や空家の闇に溢れ咲く  
ぼんやりと露天湯浸かる梅雨夕焼  
一人居に雨垂れ繁く男梅雨
- 丸山酔宵子 ○天井に乾杯ひびくビヤホール  
甚平や今日も概ね縄のれん  
夕立ちの川面蹴ちらす屋形船  
大川に潮風送る屋形船
- 菊地崇之 ○河沿いに寄り添ふじんべ紺絞り  
水打ちしおもてなしかや白き肌  
囲碁大会汗して得たる揖保の糸  
葛餅や工場直送<sup>こうばじきそう</sup>耳につく
- 吉田啓悟 ○雲の峰すくっと立ちて無職なり  
うな重の朱塗のてりや麻甚平  
黒南風や白髪<sup>こくなんふう</sup>の落ちる音のして  
落日を求めて行かむ夏の海

青木英林 ○どじゃう鍋昔馴染の集う宵  
骨酒の中に見事な岩魚居り  
風呂上り甚平を着て句を捻る  
赤信号道端に咲く合歓の花

牧野里山 ○甚平着て縁台将棋眺めおり  
山肌を紫の波揺れており  
土手沿いの青田の緑目に滲みる  
山葵田につかる素足や空を見る

佐久間たか子 ○日傘さし猶も日陰を探しをり  
汗拭い半<sup>はん</sup>跣<sup>かしゆい</sup>思惟 像の静か  
甚平の借りて着こなす若き人  
甚平着て妻ジーンズの散歩かな

山本草風 ○田搔馬今は哀しき厩かな  
喜寿すぎて夏至ひもすがら欠伸かな  
飴色の甚平眺めて父のこと  
薄暑きて冷や酒楽し昼寝かな

金森純女 ○ゴツホてふひまわり届き八重に咲き  
甚平や父は脛さへ細くなり  
白玉やボウルのなかに五つ六つ  
花屋にはカタカナあふれダリヤ咲く

佐伯兵庫 ○空梅雨や見えるダム底過去の影  
甚平や行く処なしの手賄い  
蛍狩り光が踊る影法師  
風鈴や音が迎える朝帰り

渡辺鯨波 ○甚平着て悠然とゆくピカソ館  
甚平着て密かに受ける脳ドック  
芥子の花民話の里の旅愁かな  
花芥子や能登半島の一人旅

次回「萩句会」 (八月はお休みです)

日時 2016年9月12日(月)14時～17時

場所 下目黒住区センター第2会議室

兼題 『青すすき』一句 当季雑詠三句 計四句